

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12715

研究課題名（和文）認知デモクラシー論の包括的解明：反民主的論議の興隆に対する学術的応答

研究課題名（英文）Constructing the Theory of Epistemic Democracy: A Response to Anti-Democratic Arguments.

研究代表者

内田 智（Satoshi, Uchida）

早稲田大学・政治経済学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：70755793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「デモクラシーは愚かな多者支配に過ぎない」とする反デモクラシー論に反駁するために、デモクラシーに備わる独自の認知的価値の解明を試みた。まず、認知心理学など政治学・政治理論以外の学問分野の知見も参照しつつ、人々の間でなされる正当化実践としての熟議がもつ認知的な価値と機能を詳らかにした。その上で、不確実性と価値多元性が不可避免的に顕在・潜在する「政治」の世界においては、多様なパースペクティブを携えた人々を平等かつ継続的に包摂する熟議プロセスを備えたデモクラシーこそが、よりよい認知的帰結を生み出す蓋然性が他のいかなる政体と比べても高いことを論証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、学術的意義としては、デモクラシーの正当化をめぐる認知的正当化論と道徳的正当化論を二項対立的かつ相互排他的に捉える見方に抗して、本研究は人々の間でなされる終わりなき正当化実践としての熟議をデモクラシーの中核に据える視座の下、その両者を相補的に捉える道筋を提示していることが挙げられる。

これに加えて本研究は、昨今台頭しつつある専門家支配への淡い期待に対して警鐘を鳴らしているという点で、より広範な社会的意義を有する。多様なパースペクティブを備えた人々を継続的かつ平等に包摂する熟議過程の認知的価値を解明する本研究の視座は、専門家支配が独善、視野狭窄に陥る危険性をも射程に収めている。

研究成果の概要（英文）： This study attempted to clarify the epistemic values of democracy in order to refute the anti-democracy argument that "democracy is nothing but foolish majority rule. First, we clarified the epistemic value and function of deliberation as a justifying practice among people, referring to findings from disciplines other than political theory, such as cognitive psychology. We then argued that in the world of politics, where uncertainty and value pluralism are inevitably apparent and latent, a democracy equipped with a deliberative process that equally and continuously includes people with diverse perspectives has a higher probability of producing better epistemic outcomes than any other form of polity.

研究分野：政治学・現代デモクラシー論

キーワード：認知デモクラシー論 熟議デモクラシー論 現代政治理論

1. 研究開始当初の背景

本研究の計画を構想した背景には、昨今のデモクラシーへの不信を背景として、反民主的論議 Anti-Democratic Arguments が再び注目され、これに対する学術的応答が求められていることが挙げられる。この議論の唱道者たちは一般市民の無能さを裏づける経験データをもとに、民衆は熟議を実践する認知能力をもたず、「合理的無知」を単に選択するばかりか各人に都合の良い信念充足にのみ関心を抱く体系的認知バイアスに囚われた「非合理的存在」と断じる。既存のデモクラシー論は、この「愚かな多者支配」批判に応じる理論を十分に構築してきたとは言い難い。その結果、「適切な情報と知識をもつ者以外は投票しない義務を負うべき」といった反民主的論議が学術的にも脚光を浴びている。本研究はこうした批判に反駁し、「民主政は愚かな多者支配などではなく、よりよい認知的帰結を生む蓋然性が他のいかなる政体に比べて最も高い」点を論証することを狙いとして遂行された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述の問いをふまえ、既存のデモクラシー論が実質的に回避してきた「民主政がもつ認知的価値を包括的に解明する」点にあった。具体的には、以下の手順を踏んで研究を進めた。

：反民主的論議の潮流への再反論として本専門分野で応答可能性が期待される、認知デモクラシー論 Epistemic Democracy の萌芽的展開の要諦を明確化した。これにより反民主的論議が暗に想定する人間の推論能力に関する定式化と解釈の恣意性、ならびにそれに伴う民主政に対する認知的想定の限定性（知識が乏しく受動的で、政治的思考力を欠く市民観）を明らかにした。

：人間が行う熟議の認知的「機能」が本来的に二人称的・社会的な役割であることを論証した。本研究は「推論の論議理論 the Argumentative Theory of Reasoning」の検討を通じて、この点への妥当かつ有意な論証を提示した。「推論の論議理論」は、近年顕著な発展をみせる隣接専門分野（社会認識論、行動経済学）の知見を政治理論における推論機能の分析に応用する（cf. Mercier and Landemore 2012, Mercier and Sperber 2017）。人間の実践する推論がもつ「機能」は、一般に自明視されるような個人が単独に行う誠実な分析などではない。その本来的役割は「相対立する認知的に多様な人々の間での賛否をめぐる理由の往還(フィードバック・ループ)」、つまり、二人称的・社会的な機能にある。この点の解明を試みる「推論の論議理論」の視座を取り入れ「賛否をめぐる理由の往還」として熟議を捉え直すことで、相異なる論拠の間での二人称関係における不合意の顕在化それ自体が、よりよき推論への認知的資源となることを明確にした。

：「推論の論議理論」を足がかりとする認知デモクラシー論こそが、「デモクラシーが他のいかなる体制にもない認知的価値と機能を備える」ことの有意かつ妥当な根拠を提示した。より具体的には、以下二点の要点を解明することでこれを論証した。1)現代において不確実性と価値多元性は不可避である。政治的領域に対するその重要な含意は、一旦「正解」とされる判断がなされたとしても、そこからこぼれ落ちる理に適った異論は常に残存し続ける点にある。これをふまえるならば、政治における「知」は「二人称的な認知的学習過程」での継続的な「精査と淘汰」によってはじめて向上しうる特性を有していることを本研究は明示した（Landemore 2013）。加えて、2)認知的多様性 Epistemic Diversity を熟議手続の中で包摂的・継続的に確保することこそが「よりよき民主的帰結」を生み出す蓋然性を高める根拠となる。本研究は、「多様性は専門能力に優る Diversity Trumps Ability」定理（Page 2007）の民主政に対する含意を解明することでこの根拠を証明した。

本研究は、以上の手順からなる論証を通じて、「相互的・包摂的・継続的な理由の往還」としての熟議手続を備える民主政こそが最も高い認知的価値と機能を充足する蓋然性をもった政治体制である」ことを明示した。

3. 研究の方法

まず、政治理論分野における認知デモクラシー論、熟議デモクラシー論の最先端の動向を批判的に検討し、反民主的論議への応答可能性という観点から見て従来の理論が抱える限界・課題の析出を行った。他方で、認知心理学や社会認識論、行動経済学など近接する学問分野の知見を参

照しつつ「推論の論議理論」の精緻化を進め、二人称的な「理由の往還」実践としての熟議に備わる認知的価値と機能を解明することによって、「デモクラシーが他のいかなる体制にもない認知的価値と機能を備える」ことの有意かつ妥当な根拠を構成した。

4. 研究成果

【雑誌論文】

・内田智「現代デモクラシー論における熟議の認知的価値：政治における『理由づけ』の機能とその意義をめぐる再検討」、『政治思想研究』第19号、2019年、270-302頁（[査読有](#)）

【学会発表】

・内田智「現代デモクラシー論における認知的多様性の意義：信頼、熟議、そして民主的理性」第25回政治思想学会（於：甲南大学）2018年
・内田智「グローバル化時代におけるデモクラシーと政治的平等：『デモス境界線』問題の再検討を通じて」現代規範理論研究会（於：駒澤大学）2019年
・内田智「『危機』の時代におけるデモクラシーの再構想：開かれた、迂回を許さない政治体制としてのデモクラシーの実現に向けて」民主主義理論研究会（オンライン開催）2021年
・内田智「語り合うこと／語り合うことはできるということ：変容する政治空間のただなかで積み重ねられた知的格闘の軌跡」高橋良輔先生追悼研究会（於：青山学院大学）2021年
・内田智「『民主主義の危機』を超える民主主義の未来：私たちのあいだで紡ぎだす正当化実践の価値と制度」山崎望編『民主主義に未来はあるのか？』出版記念オンライン合評会（主催：立命館大学人文科学研究所）2022年

【図書】

・内田智「グローバリゼーションと平等：『デモス境界線』問題の批判的検討を通じて」新村聡、田上孝一（編著）『平等の哲学入門』所収、社会評論社、2021年
・内田智「『民主主義の危機』を超える民主主義の未来：私たちのあいだで紡ぎだす正当化実践の価値と制度」山崎望（編著）『民主主義に未来はあるのか？』所収、法政大学出版局、2022年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 内田智	4. 巻 第19号
2. 論文標題 現代デモクラシー論における熟議の認知的価値：政治における「理由づけ」の機能とその意義をめぐる再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 政治思想研究	6. 最初と最後の頁 270-302
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 内田智
2. 発表標題 「危機」の時代におけるデモクラシーの再構想 開かれた、迂回を許さない政治体制としてのデモクラシーの実現に向けて
3. 学会等名 民主主義理論研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内田智
2. 発表標題 語り合うこと / 語り合うことはできるということ 変容する政治空間のただなかで積み重ねられた知的格闘の軌跡
3. 学会等名 高橋良輔先生追悼研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内田智
2. 発表標題 グローバル化時代におけるデモクラシーと政治的平等：「デモス境界線」問題の再検討を通じて
3. 学会等名 現代規範理論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田智
2. 発表標題 現代デモクラシー論における認知的多様性の意義 信頼、熟議、そして民主的理性
3. 学会等名 第25回政治思想学会（於：甲南大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田智
2. 発表標題 「民主主義の危機」を超える民主主義の未来：私たちのあいだで紡ぎだす正当化実践の価値と制度
3. 学会等名 山崎望編『民主主義に未来はあるのか？』出版記念オンライン合評会（主催：立命館大学人文科学研究所）（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 内田 智	4. 発行年 2021年
2. 出版社 社会評論社	5. 総ページ数 392
3. 書名 「グローバリゼーションと平等：『デモス境界線』問題の批判的考察を通じて」、新村聡、田上孝一（編著）『平等の哲学入門』所収	

1. 著者名 内田智	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 306
3. 書名 「『民主主義の危機』を超える民主主義の未来：私たちのあいだで紡ぎだす正当化実践の価値と制度」、山崎望（編著）『民主主義に未来はあるのか？』所収	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------